

聖書 イザヤ書54章1〜8節、マルコ福音書10章13〜16節

マルコ福音書10章13節以下でイエスが子どもを祝福する有名な場面が出てきますが、この個所を現代の子どもに対するイメージで読んでしまうと、誤解をさせていただきます。現代は、子どもを基本的には大切にすることが前提になっている社会です。しかし、歴史的に見ると、子どもは決して大人によって大切にされる存在ではありませんでした。イエスの時代もそうで、子どもは大切に育てられてきたわけではありませんでした。確かに、古代の時代劇で君主や領主が自分の子どもを大切にするような場面が描かれています。それは自分の領地や財産を引き継ぐ存在が自分の子どもでもあるからであって、子どもを自分の所有物の延長線上で捉えていたからです。イエスの時代、一般庶民は自分の子どもに受け継がせるような地位や財産を持っていたわけではありません。基本的には、その日暮らしの生活をしている人たちが大勢を占めていましたから、自分の子どもとも言えども、自分の食い扶持を脅かす存在でしかなかったのです。イエス時代の子どもは、愚鈍で愚かな者の比喩に用いられるような存在だったのです。

子どもという存在が社会的に見て、弱者であったということは今や社会学の常識です。子どもの人権がともに唱えられるようになったのはごく最近の20世紀に入ってからの子ども観なのです。たとえば、産業革命はイギリスで18世紀半ばから19世紀にかけて、石炭利用による蒸気機関の発明で起こったと、私たちは教科書的な歴史認識を持っています。けれども、当時イギリスで石炭を掘っていたのは子どもたちでした。チャールズ・デイケンズの小説「オリバー・ツイスト」を読むと分かりますが、産業革命当時の子どもたちはひどい扱いを受けていました。安い賃金で過酷な労働に従事していたのです。今では考えられないことですが、当時の政府はあまりに苛酷な労働に対する抗議活動で工場の機械を壊した者を死刑にするなどの対処をしていました。もちろん、イギリスで産業革命が起こった背景には、当時、植民地から搾取した物資が寄与していたことは間違いないことです。イエスの時代の子どもたちも同じで、大人たちから、ちっぽけで無価値な存在とみられていたのです。

にもかかわらず、イエスが「子供たちを私のところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。はつきり言っておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない」(14〜15節)と言って、イエスに触れていただくために人々が子供たちを連れて来たことに、弟子たちが怒ったことを叱ったのは、子どもたち当時社会的には邪魔な存在であったからです。にもかかわらず、イエスは子供たちを抱き上げて手を置いて祝福された。たとえば、マタイ福音書18章の冒頭で「いったい誰が天の国で一番偉いのか」という質問に対して、「心を入れ替えて、子供のようにならなければ、決して天の国に入ることはできない」(3節)というイエスの言葉を、天国に入る資格が『幼児のように』謙虚になることだと解釈するのは、当時の社会状況を鑑みるとおかしなことなのです。そうではなく、「鼻たれ小僧よ」と罵られるほどの無価値な存在こそが天国に最初に入るのだと言ったのです。ですから、生きる姿勢として子どものように謙虚になることが天国に入るためには必要だと解釈するのではなく、当時の子どものように社会的に無価値で邪魔な存在であることが神の国に最初に入るのだとイエスは言ったのです。

子どものように純粹で無邪気で、素直な信仰を持つならば、たとえ小さく弱い存在であったとしても、神は受け入れてくださる。この世的な価値観で言えば、99匹の羊を無防備に置き去りにしたとしても、迷い出た1匹の羊を探すように、神は無価値と思えるような小さな者たちの価値を大切にしてください。そういう者がこそが神によって天国に招かれているのだということを意味する譬えとして、長らく幼児祝福の聖書箇所は理解されてきたように思います。このような前提で、イエスの幼児祝福の聖書箇所を理解すると、子どものような素直な信仰を大切に保ちながら、自分の無力さを謙虚に認めることが大切であるという信仰姿勢が強調されることになります。けれども、子どもは素直で無邪気な存在であり、小さな天使のような存在だと理解する子どもも観というのは、先ほども申しあげたように20世紀になつてから生まれた考え方なのです。

イエスの時代の子どもは、愚鈍で愚かな者の比喩に用いられるような存在でした。つまり、親の思う通りに子どもは育たないと言うこともできるのです。それにもかかわらず、イエスは当たり前のように子どもたちを祝福された。なぜか。私たちのプロテスタント教会の信仰は自覚的な信仰告白を基準としています。今でも忘れられない話として記憶しているのですが、教団の牧師で、自分の小さな子どもが病気で早くに亡くなってしまったことを悔やんでいる牧師の話を知ったことがあります。その牧師は幼児洗礼を施せばよかったと悔やんでおられました。キリスト教の歴史においては、死後に洗礼を授けるということも行われてきました。その是非を問うことはある意味簡単です。けれども、洗礼は本人の自覚がなくても、神の恵みが本人の自覚的信仰よりも先にあることを裏付けるものでもあるのです。残念ながら洗礼を受けたあとに信仰から離れることはあるのです。そういうことさえ神は織り込み済みで洗礼を授けているのです。このように考えると、イエスが当時の社会的に無価値な存在であった子どもたちを祝福して、誰よりも先に神の国に入る存在として捉えていたことの意味がわかってきます。

第一に、社会的な評価に左右されないで、どんな存在も神は受け入れてくださるということです。それはまた、ご自分が創造された存在に対してすべて責任を持っているという神の姿勢を現わしています。第二に、人間の自覚的な意識に先行して神は人間存在を導いておられるということです。ですから、赤ん坊のように信仰的な自覚がなくても洗礼を授けることができるということです。もちろん、その信仰を親や教会が支えていかななくてはなりません。どのような結果になつたとしても神に委ねるといふ姿勢が保護者には求められるということです。第三に、自覚的に信仰を告白しているキリスト者が自覚的に信仰を告白できない存在を否定したり、排除してはならないということです。最近、LGBTをカミングアウトする方がやっとなってきましたが、私の実感としては、そのような方々がカミングアウトするまえからキリスト教会に来ていたと思います。それはイエスがすべての存在者を受け入れてくださる方だということを無意識にも感じていたからだと思います。次に問われているのは私たちです。いろいろな方を排除していないかを自己点検してみる必要があるかもしれません。